RIA 建築総合研究所

―楽しかった過去の事実はその事実すらも幻想の中 ―

実像は虚像に、そして記憶に

1972年、いかめしい名前のRIA建築総合研究所の名古屋支社に、中学、高校の後輩で、同じ大学の大学院に同席の桜井大吾さんが勤めていた。そこで春日井市の勝川駅前の再開発事業のレポート見て、再開発という業務を知った。そして数年遅れて、富山市総曲輪地区市街地再開発に参加することになった。これは忍耐と根気を学んだプロジェクトで、長い期間を費やしたPESとしては、最初の大規模な仕事であった。その時の支社長の久米幸一さんとは、親亀、子亀と呼び合って辛苦を共にする時代であった。その時のエピソード印象深いのは、新しい建物の中で営業する予定のうどん屋さんから、今まで使っている井戸水の確保が要求された。既得権を主張するというより、水質とその温度が自分の店の味を作り出しているというものであった。人間の味覚の自然さは人工のものを否定するということを気付かされた。設備システムは9階の機械室には中央熱源として、電気を使用しないガス炊きの川崎重工業製の470冷凍トンの冷温水発生機を設置し、電源は全て400V,とするシステムとした。送風機製造を始めていた松下電器産業は、換気扇類を受注することになった。松下電器産業とはその後、1983年、65周年の記念式典に講師で呼ばれる光栄に浴した。

川崎重工業とのその後の因縁は、アメリカで起きた、Norwalk病院の川重製の2000KWのガスタービン発電機の損傷の訴訟時に、原因解明のため、アメリカの保険会社からの委託で、明石の本社工場での現地立ち合いで検証することになる。

その後RIAとは親しい信頼関係が築かれ、コンペ方式の物件では、提案作成時には、設備側からのアイディアを提供して、共に勝利を味わうことにつながった。

桜井さんは、その後支社長になって引き続きの関係で、40年の付き合いになった。

富山市総曲輪再開発

三ヶ日町民センター